

リスボン大地震 ― 近代ヨーロッパの社会的震撼 ―

永治日出雄

第二集 巨大地震の衝撃と破壊

論文 第三

ローマ教皇大使アシエウリの通信

リスボン大地震に関するローマ教皇庁の史料は、久しくヴァチカンの機密文書として秘せられてきたが、一九六六年ポルトガルの聖職者アルナルド・ピント・カルコドソによって学術誌『思想史論叢』に主要な内容が発表された。震災二五〇年に際してこの成果は、叢書『凄惨なるリスボン大地震』の第二弾、『教皇大使フィリッポ・アシエウリの通信ーヴァチカンの機密古文書』として世に送られた。^①ここに集録される記録の過半は、当時ポルトガルに駐在した教皇大使フィッリポ・アシエウリの震災報告であり、ほかにローマ教皇ベネディクト十四世の小勅書、同國務長官ゴンザガの返信、その他若干の関連史料が含まれる。なお、これらの文献を編纂したカルコドソは、かつてローマやエスサレムで神学を修め、現在はポルトガル歴史アカデミー会員ならびにカトリック大学教授の職務にある。また、この集録の刊行に際して、彼はラテン語ないしイタリア語の原典を、すべて現代ポルトガル語に翻訳している。

アシエウリの報告は本来教皇庁の公文書であるが、みずからの凄絶な体験と身辺の凄惨な様相も痛切に綴られ、被災者の貴重な証言のひとつをなす。しかし、この記録でとくに注目すべきは、教皇大使として彼が、国王ジョアン一世と國務尚書カルヴァリョを主軸とする宮廷の要人、さらには総大司教を頂点とする高位聖職者と頻繁に会見し、未曾有の国難に曝されたポルトガル王権の危機管理とカトリック教権の応急措置に直接参与したことがある。さらに、ローマ教皇庁へ宛てた彼の報告が、大地震発生の直後より翌年六月二九日まで毎週定期便として発送され、公刊されただけでも長短四五通に達することも、得難い史料と言えよう。

また、アシエウリへの応答である教皇ベネディクト十四世の小勅書と國務長官ゴンザガの返信は、リスボン大地震がカトリックの総本山をいかに震撼し、苦慮させたか立証する。しかし、各国を結ぶ通信網遮断のため、アシエウリの被災第一報はようやく十二月の上旬ヴァチカンへ届き、ポルトガルへの教皇庁返信もその時点以降しか現れない。したがって、本稿ではまず十二月上旬までを第一段階として区切り、教皇大使からの通信のみを逐次検討せざるをえない。また、これら通信の編者カルコドソは、大地震と関連の薄い事柄を至当にも省略したほか、教皇庁等への配慮から若干の記述の公表を見合わせことも考えられる。なお、本稿での試訳に関しては、カルコドソによるポルトガル語訳に依拠し、各通信に便宜上番号を付した。

教皇大使アシエウリはノビ侯爵オタボアノ・アシエウリの三男として一七〇〇年ローマに生まれた。十七世紀後半に活躍した同名の音楽家フィリッポ・アシエウリは彼の叙祖父にあたる。大使はイエズス会随一の教育機関、一五三四年イグナチオ・デ・ロヨラによって創立されたコレジオ・ロマーノで学業を修め、ローマ最古の大学、教皇ボニファティウス八世の創立によるユニヴェルシテ・サピエンツァで教会法と市民法の博士号を取得した。ほどなく二四歳の若さでヴァチカン政庁の伝奏官に任じられ、一七四四年から十年間スイス駐在のローマ教皇大使を勤めた。同じく教皇大使として彼がリスボンに着任したのは、一七五四年二月である。一四八一年教

^① *Revista de História das Ideias, Faculdade de Letras da Universidade de Coimbra, vol.18 (1996), pp.441-510.*

Arnaldo Pinto Cardoso, *Correspondencia do Nuncio Filippo Acciaiuoli (Arquivos Secretos do Vaticano), O Terrível Terramoto, da Cidade que foi Lisboa, 2005, Lisboa.*

Nunciature to Portugal in Catholic Hierarchy online.

皇庁から最初の大使を迎えたポルトガルでは、一七二〇年以降この地位が空席であった。① 一七五五年三月彼は王立歌劇場の落成を祝す晩餐会へ、ポルトガル駐在スペイン大使ペレラダ公爵や英国海軍艦長オーガスタス・ハーヴェイとともに招かれる。

ヴァチカンへ向けた教皇大使アシエウリの報告は、毎週火曜日に公用至急便で発送された。一七五五年十一月一日大使公邸で大地震に襲われたアシエウリは、三日後に教皇庁と実兄に向けて書簡を綴った。しかし、最初の報告はついに教皇庁へは届かず、今日閲読できるのは私信のみである。なお、カルコドソによる集録に兄弟とのみ誌されているが、私信の宛先はローマ市会議員アントン・フランシスコ・アシエウリであろう。

ローマ教皇大使フィリップ・アシエウリ、一七五五年十一月四日付

兄（アントン・フランシスコ・アシエウリ）宛書簡

親愛なる兄上君へ

死の淵に立ち、丸裸かで惨めで文なしとなった私が、それでも奇蹟的に救われ、ベネディクト会修道院の敷地に設けられたテント、ふたつの丸太で組まれ、僧院の絨毯と布地を敷いた仮設小屋から、そなたにお便りします。万聖節の土曜日、午前十時に地震が発生し、八分間足らずでリスボンは壊滅しました。地震のあともなく火の手が昇って、数々の建物を焼き、王都の各地へ次々と拡大しました。大火はいままも続いて、私の住居にも迫り、これを遮るいかなる手立てもありません。総大司教教会、王宮、新築の大劇場、さらには税関所と所蔵庫も燃え、ありとあらゆるものが焼失したのです。ベレンでは離宮が破壊され、国王は下着のまま脱出され、緑地の御車のなかで休まれます。そして、即日王室ご一家のため仮設小屋を用意するよう命令がなされました。私にも仮設小屋を供するよう頼みましたが、応答が得られず、傷ついたまま家族とともに僧院の覆いと布地で凌いでおります。幾千もの人々が神の慈悲と赦免を願い、できるかぎり私もそれに応じています。昨日の朝緑地でミサが行われ、生き延びた人たちを祝福しました。形式どおり彼らはまず私を抱擁して手に接吻し、ついで大地に身を伏せたのです。亡き人たちには秘蹟を施し、負傷した人たちには外科医が巡回し、幾千もの死者を埋葬すべく、その都度空地を浄めました。スペイン大使公邸が全壊し、ご子息は救出されたものの、不運にも大使ご自身は瓦礫に埋れました。未曾有の凄まじい脅威に感じられ、上履きと寝巻きのまま瓦礫と遺体の上を歩き、荒墟のなかに身を潜めています。私の秘書、家主、経理担当、さらに手飼いの騾馬も死にました。要するにあらゆるものが脅威と惨状に覆われ、リスボンは瓦礫の山脈へお一変したのです。地下の火焰から発した炎が、ついにわが大使館にも迫り、地震に耐えたすべての建物を焼き尽しました。いままも私は錯乱と艱苦の渦中におります。被災の総額はすくなくとも数億（ペソ）に及ぶでしょう。敬具。②

大使アシエウリの定期的な報告は、ローマ教皇へ直接送付するのではなく、通常は教皇庁国務長官に届けられた。カルコドソの編纂になる冊子は、アシエウリの公的な通信四五通を収録するが、うち三四通は国務長官宛であり、教皇宛文書は十一通で、おおむね短文である。国務長官はヴァチカン政務機構の中核であり、いわば各

① Acciaiuoli, Filippo (1700-1766) in *The Cardinals of the Holy Roman Church, Biographical Dictionary*,

Pope Clement XIII (1758-1769), Consistory of September 24, 1759 (III). on-line.

Acciaiuoli, *Genealogia dei personaggi di spicco in Wikipedia online*.

Nunciature to Portugal in Catholic-Hierarchy online.

② Cardoso, *op.cit.*, pp.20-21.

国における首相兼外相に相当し、枢機卿のひとりでもある。兄宛書簡とともにつぎの報告は、地震発生を伝える迫真の記録であり、執筆と発送の月日に疑念を残すが、まず記述の脈絡を辿ってみよう。

ローマ教皇大使アシエウリ、一七五五年十一月十四日付（四日付？）

教皇庁国務長官枢機卿シルヴィオ・ヴァレンティ・ゴンザガ宛報告

身边が深い錯乱と苦衷に私自身があるため、これなる王都と住民に神が与え給うた激甚な災厄について、いまだ報告できない状態です。土曜日の午前十時半頃、巨大な地震が襲い、七分か八分で王都の大半を壊滅させました。そのみでは神の怒りを鎮めるには足りず、さらに各地で火災が発生し、地震の被害を免れた建物も多数類焼させました。これを書きつつある現在も大火が止まず、私の住居にまで迫ったので、日曜日の午後そこから脱出し、瓦礫と遺体を踏み分けて、ベネディクト会の修道院へ辿り着きました。修道院の裏手に広い緑地があつて、そこで私はテント小屋を供され、多様な有様にある大勢の人たちと出会ったのです。

凄まじい荒墟と化したため、リスボンの復興を数年ではできないでしょう。死者の数も莫大に達し、墓地を造るためアーバード神父の権限によって地所を浄化する必要があります。昨日そのように判断されたのはふたつの事由、無数の遺体があるためと多数の教会が壊滅したためで、いまだ壊滅に至らぬ教会にも倒壊の危険が感じられます。王宮、総大司教教会、税関所はなかば倒壊し、そのあと火災によりすべて焼失しました。

これらの建物に関しては消息不明の人たちもあり、総大司教教会は讚美歌斉唱の最中でした。ベレンの離宮がかなり破壊されたものの、国王と王室ご一家は緑地へ避難されて仮設御所に落着き、国王は四輪馬車のなかで睡眠を取られます。総大司教枢機卿下は柙席の座席におられ、出口が遮断されたまま、天井部分が崩れ落ちましたが、お身体は無事でした。ふたりの従者が柙下を外へ担ぎ出し、その直後王宮全体が壊滅しました。スペイン大使公邸も同じように破壊され、ご子息と従僕数人は救出されましたが、大使ご自身は行方が判らず、瓦礫に埋もれたと思われます。体調が悪いと、当日の朝大使が私たちに連絡されたばかりでした。

私の邸宅も甚大な被害を受けました。上階は即座に破壊され、居合わせた下階では庭園との障壁が倒壊しました。そこで私は跪いて、その日のミサを準備していたのです。すぐに門を開けると、目の前で壁が崩れるので、庭に出る階段へ急ぎ、その降り口で転倒しました。石灰の粉から発する灰燼で目が眩んだのです。奇蹟的にも他方の戸がふたつ開き、半裸のまま庭園へ駆け降りると、建物の向側が崩れました。破壊された家屋の下敷になって秘書の姿が消え、召使のオウディツールと家畜の騾馬だけが一階にいました。瓦礫のもとでテントを建てることもできず、普段着や帽子や上履きも借用することもできず、その一昼夜庭園で辛抱しました。帽子などはさきに申したとおり、階段で転倒し、庭へ駆け降りたときに、紛失したのです。このような身なりなので、大きな危険を伴うものの、昨日召使に荒墟のなかで品々を探すよう頼みましたが、ほとんどの家財は、火焰により灰燼にいまや帰したと明言されました。いまでも貧弱な家屋について、不慣れな従僕と小僧しか使えません。一昨日私は内科医の診察を受け、瀉血と傷の手当てを受けました。死者の数が住民の三分の一に及ぶと推算されますが、現在すべて混乱の渦中にあり、届いた情報も多くは証左のないものです。ここにも不断に死者や病人が運ばれ、病院か墓地に移されます。深い愛徳によって修道士たちは、この仕事を辛抱強く模範的に果たすのです。今朝瀕死の人と私たちに聖体拝受ができるよう、テントが工面されました。災害の規模は私の体験や伝聞のなかで、もっとも大きなものです。

国務長官枢機卿下におかれては、私の雑然とした報告を寛大に扱われるよう望みます。だれの叫びや涙も言葉では表現できないので、聞けばきくほど、私の混乱は増していきます。一方では父や妻や子を捜し、他方ではしきりに施しを求めめるのです。火災が私たちの災厄を一層増幅し、土曜、日曜、月曜午前にも、軽度の地震をしばしば感じました。そのたびに新たな被害、新たな死亡や負傷が生じます。道路に埋めた遺体

もありますが、墓地への埋葬を昨日から始めました。

宮廷の様相はだれも知りません。しかし、国王と王家全員はテージョ河対岸のアレンテージョへ移動すると言われます。私への処置は、国王から指示があるでしょう。なぜなら、リスボンで住居を探すのはいまや不可能です。崇敬する國務長官枢機卿猊下に教導をお願いし、みずからを律するほかありません。①

未曾有の災害に対するポルトガル王権の危機管理は、ジョゼ・デ・カルバルホ・エ・メロ、すなわち國務尚書カルヴァリオの主導で迅速に着手された。ジョアン五世のもとで総務長官の地位にあったペドロ・ダ・モタは、老齢にして病身であり、以前から政治の実権は外務長官兼軍事長官のカルバリョにあった。のちにアシエウリの報告で語られるとおり、避難した自邸の土蔵でペドロ・ダ・モタは十一月十七日逝去し、國務尚書カルヴァリオ、のちのポンバル公爵が名実ともに最上位の閣僚として政務に献身する。②

各国の宮廷を繋ぐ郵便網も遮断され、震災後アシエウリの報告が教皇庁に初めて届いたのは、翌月の十二月十日である。後述のとおり、折り返し発送された返信によれば、十一月四日付報告を國務長官ゴンザガは受け取っていない。こうした記述を考慮して、フランスの研究者ジャン・ポール・ポワレルは、十一月四日付の第一報として弟宛私信しか遺されていないとしながらも、別の典拠から十一月四日付報告として右記史料の一部を引用した。③また、カルコドソは同じ史料を十一月十四日付と記しつつ、収録における配列では不整合にも十一月十一日付報告の前に配置している。

こうした史料の混乱について筆者の推測を示せば、十一月四日に発送された國務長官宛報告は、郵送網の遮断によっておそらく紛失したであろう。しかし、四日付報告は有力なカトリック教国における大事件の勃発を伝える記録である。したがって、文書の紛失が明瞭になった時点で、同じ内容を再度記述するようアシエウリが求められたか、みずから感じたとしても奇異ではない。弟に宛てた十一月四付書簡や十一月十一日以降の報告と比較しても、問題の報告がより整然と綴られていることは事実である。

ローマ教皇大使アシエウリ、十一月十一日付教皇庁國務長官ゴンザガ宛報告

これなる王国と王都に神が下された怖るべき災厄を、先回の通常報告で猊下にお伝えしましたが、翌日曜日の午後一時までに数度余震を感じたことを重ねて報告します。これら弱震の被害は、前日の強震で打撃を受けた障壁や外装の崩れに止まりました。しかしながら、併発した火災は金曜日まで続いて、地震自体の被害に劣らぬ破壊を惹き起し、加えて大勢の盗賊が人々の艱苦を倍加させ、不埒にもふたつの建物に彼らは放火しました。こうした事態は緊急政策の実施によっていまは是正されました。然るべき刑罰を与えるべく、悪辣な盗賊が鉄鎖に繋がれたのです極刑が下ると噂されますが、まだ執行はされません。

水曜日までの道路も瓦礫で埋もれ、遺体の搜索が不可能でした。スペイン大使、プレラダ伯爵の遺体は自邸の出口で発見され、ご家族によってただちにサン・ベント教会へ運ばれました。この教会にはカタルーニャ生れの聖女モンセラートに捧げた礼拝堂があり、カタルーニャだけの墓地が造られています。この知らせを受けて私は、自分のテントを教会へ移して、中庭に立てるよう指示し、教会にはカトリックの葬儀に

① Cardoso, *op.cit.*, pp.22-25.

② John R. Mullin, *The reconstruction of Lisbon Following the Earthquake of 1755 : a study in despotic planning*, in *University of Massachusetts, Landscape Architecture & Regional Planning Faculty Publication Series. Paper 45.* online.

③ Jean-Paul Poirer, *Le tremblement de terre de Lisbonne 1755*, Paris, 2005.

相応しく準備させ、みずからは聖衣を着服しました。こうして赦免等の儀式を行うとともに、柩の運搬を神父たちに命じ、その蓋も死者の銘を刻ませて、前述の墓地に埋葬させたのです。

その翌日従僕たちが荒墟のなかに私の秘書を見つけ、教区教会の墓地に埋葬しました。執事の行方はまだ判らず、隘路にある建物の下敷となったようです。ここでは高層建築が倒壊し、瓦礫と土砂に覆われるため、掘り出しに必要な人夫が得られないでいます。部屋着と上履きと頭巾しか身に付けていないので、従僕たちは秘書の遺体を発見したあと、荒墟で私の居間へ立ち込み、必要な礼服を探してくれました。

木曜日の朝私はベレンへ行き、緑地に建てられた仮設御所と仮設宮廷を訪ねました。来訪を聞いて御所から出られた国王陛下は、王妃陛下ならびに親王お三方とともに、私のお見舞に応えられました。公的な祈禱や赦免の儀式を行うよう便宜を図ると約束され、いまだ椅子を欠かせぬ総大司教猊下の代行を私に依嘱されました。王后陛下と親王殿下にもお見舞を申し上げ、それぞれの方から感謝のお言葉を頂きました。ふたりの閣僚、メンドツサ閣下とカルヴァリヨ閣下にも聖俗両面にわたり慰藉を捧げ、自分のテントに戻りました。また、日曜日にもベレンへ行き、まずペドロ親王殿下と、ついで国王陛下とお話しました。これなる王都と王国に対して、神が与え給うた大きな懲罰をどう考えるか、と私にまず質問され、ローマ教皇猊下に確知頂きたいこと、私を圍繞する錯乱、動転、艱苦について猊下に余さず報告すべきことを付言されました。キリスト教と総大司教座に相応しい国王陛下をはじめ、あらゆる人々に豊かな愛徳を抱かれる神が、慈父の愛によって下された劇的な試煉のなかで、語るにはあまりにも悲痛な艱苦も、ここで得られた安らぎで、どうやら緩和しております。公式の祈禱を行い、ささやかな寄進を供したいと申し上げると、有難くも国王陛下は私の提議を叶えるようカルヴァリヨ閣下に指示され、木曜日から数日ベネディクト会の施設で実施しました。その後彼を訪ねましたが、会えません。夫人の話によれば、私に合うため出掛け、テント小屋へ来られたのです。聴聞司祭に関して私に伝言を残され、明朝彼と告解を行うためベレンに赴くとの由です。この施設はあれこれの聖職者で混み合っていますが、特筆すべきことは行われていません。

当然国王陛下は非常に困苦され、宮廷も悲嘆に沈んでいましたが、私のお見舞は陛下をはじめほかの方々にも慰めとなったようです。そこへの道程は難渋であったものの、自分の責務を果しました。

なお、ほぼ同様にアルガレヴ国全域も壊滅し、王都周辺の諸地域やアレンテージョ地方も全滅しました。マドリッドにおける被害については、やはり強烈な地震に襲われたが、破壊は軽少であると聞きます。当日マドリッド宮廷はエスクリアル宮へ避難し、テンドで一夜を過したけれども、翌日には通常の王宮に戻られたようです。

テージョ河は七度氾濫し、住居や船舶の板や柱が路上に散乱するのを私は見ました。尼僧院での死者は修道女の三四名に止まります。だけですが、総大司教邸は一〇所帯、スペイン大使館では九人、私の邸宅では三人が亡くなりました。

大勢の人々が荒墟になお埋もれ、破壊された建物の石材や残骸で多くの道路が通れないため、死者の数はいまだ確定できません。私の邸宅はあちこちが崩れ、ほかの住宅よりも大きく破壊されましたが、火の手はそこに接近する寸前に消えました。だれもが緑地の仮設小屋に避難し、総大司教猊下はオラトリオ会の山荘に、フランス大使の家族全員とスペイン大使のお子さまはフランス領事の別荘におられます。イギリス大使と同様、ナポリ公使も王都の閑静な地域に留ったままですが、前者の公邸へはオランダ公使が家族ぐるみで身を寄せました。これらの邸宅では家具を修理も補充もできません。フランス大使館は正面を破壊されなかったものの、後方に相当な被害を受けました。だれもが家財や輓馬や騾馬を失いました。総大司教猊下とその従者も輓馬や騾馬をすべて奪われ、私も同様の損失を蒙りました。

ここサン・ベント修道院には王命により治療所が設けられて、毎日大勢の負傷者が運び込まれ、特命を受けたふたりの外科医が不断に治療を続けています。彼らの多くはすでに息絶えました。傷病者に聖体を授けるため、私もその場へ行き、応急の墓地を造らせて、哀れな死者の配送に立ち会ったのです。そこでは三二名の聖職者が孜々として働き、あらゆる艱苦に耐える規範となっています。まだ総大司教猥下をお見舞できずにはいますが、必要におうじてすぐにもお訪ねするつもりでおります。 国務長官枢機卿猥下様のご加護とご愛徳を懇願しつつ、苦渋に満ちた報告を終わります。 敬具。

教皇大使アシエウリ、十一月十一日付ローマ教皇ベネディクト十四世宛報告

今日一日これなる王都で発生し、継起する非常事態については、国務長官枢機卿猥下に四日付書簡でお伝えし、本日も引続きこの災厄について申し上げましたので、教皇聖下におかれても異常な報告を寛恕頂けたと存じます。・・・早速国王陛下からお言葉を受けましたが、極度に動転されつつ陛下は、教皇聖下にお伝えすべきか否かを尋ねられ、さきの書簡に誌したとおりにお伝えしました。教皇聖下が慈父の愛をもって公的に祈禱をされるとともに、お見舞いと励ましの小勅書を発せられたのは、まことに適切と存じます。痛風と喘息に悩む総大司教猥下を、総力を挙げてお護りすべきことも、国王陛下と宮廷全体に進言致しました。

国務尚書カルヴァリョ閣下が遅くしか宮廷に帰還されないと聞き、瓦礫に覆われた難渋な長い道を辿り、暗くなる前に自分の仮設小屋まで戻ろうと考えました。なお、国王陛下をお尋ねした際、教皇聖下の小勅書については、最初に国務尚書に示すことも、託すこともできないため、まだ奏覧ができません。神の加護があれば、明日提示できるでしょう。宮廷も王都も王国も遍く悲嘆に沈んでいます。これからは障害も軽減されると、望みをかけています。ベネディクト会の広い緑地に建てられた板造りの仮設小屋にいますが、ここへは大勢の人々が避難し、傷病者のため治療所もあります。緑地の隅を布地で仕切って、私は彼らに聖体を授けたり、ミサを行いました。自分が住んでいた建物は、すっかり破壊され、四方に崩れたものの、辛うじて類焼を免れております。破れた衣類を繕い、あり合わせのもので身を包む有様です。・・・

総大司教枢機卿猥下は燦然たる宗教的精神を示され、私の頼りない判断を援助されました。教皇聖下、言語を絶する危疑と惨状にあり、拙い報告しかなしえなことを、重ねてお赦してください。①

教皇大使の公邸が当時どこに位置したかは、教皇庁への報告にも誌されていない。しかし、隘路の倒壊や火焰の接近との記述から推測すれば、前述のポルタル神父と同じく総大司教広場からシアード地区へ至る坂道、あるいは貿易商ブラドックのようにサン・パウロ教会一帯の密集地区とも思われる。

総大司教教会の破壊と総大司教の脱出についてもアシエウリの記録は綿密である。ペレイロ溪谷のオラトリオ会山荘へ避難したマヌエル・ダ・カマールは、ポルトガル王権の緊急政策に参与し、神父フィゲイレドによる記録『リスボンの地震・火災に関する報告』では救援活動の傑出した功労者として讃えられる。しかし、総大司教は喘息など持病も悪化し、ときに教皇大使が代行を勤めたことも、この報告によって判る。

前記十一月十一日付報告とともにつぎの同月十八日付報告も、通信網の回復によって十二月十一日法王庁に届いた。このときの配達にはさらにふたつの断片的な報告が含まれる。十一月十八日の日付を記されているが、叙述の仕方と内容から六日（木曜日）以降の早い時期で綴られたものである。

教皇大使アシエウリ、一七五五年十一月十八日付教皇庁国務長官ゴンザガ宛報告

① Cardoso, *op.cit.*, pp.25-35.

国務尚書カルヴァリヨ閣下と長時間協議できましたが、国王陛下が水曜と日曜に奏上した私の提案や希望を聴取され、返礼のためサン・ベント緑地へ出向するよう閣下に命じられたとの由です。また、王都の惨状と地震の被害に対処し、祈禱行事を開始する方策をも、陛下のご意向として私に示されました。なお、あらゆる教会、修道院、尼僧院の壊滅を目撃した私が、国王陛下へ率直な見解を述べてほしい、と付言されたのです。

道路に放置された遺体を埋葬し、飢えた民衆に食べものを配り、盗賊や罪人に嚴罰を下すという緊急政策が発せられることに、相談を受けた者として賛同しました。不慣れた緑地で木造りの粗末な小屋にいる私は、惨めにも宮殿に遠く行き難いので、ベレンに近く、地震被害を免れた持家をせめて冬の間借りうるよう、周旋人への王命で手配頂けないか、と国務尚書に懇請しました。閣下はそれを約束され、お言葉どおりに昨日周旋人から、尽力したいとの意向を頂き、本日この手紙を送ったあと、会うことになっていきます。

今日まで震動がたえず発生し、地震の恐怖はまだ続いていきます。火災もそれに劣らず被害を拡げつつ、八日間続いて本日終息しました。極言すれば、私が住む街角の建物三つだけを残して、次々と住宅地を燃え立たせ、さら地では麦藁や牧草や紙屑を焼いて終息したのです。盗賊も大きな損害を与え、数名は建物への放火を自供しました。今週九人か十人が判決を受け、いくつかの広場に組まれた絞首台で処刑されました。盗み隠して船舶へ運んだらしく、総大司教教会で盗まれたさまざまな物品や多額の貨幣がイギリス船のなかで発見されたのです。

宮廷も仮設御所に移り、身分を問わずだれもが仮設小屋にあります。処刑が行われて以後、掠奪は減ったと聞きますが、いずこも開け放しのままで、盗みを防ぐのは困難です。王都の道路にはいままも建物の残骸が積み重なり、多くの遺体が埋れたままに相違ありません。したがって、家に戻ろうにも狭い道が通れず、高台にある私の邸宅も石材や漆喰に覆われるため、執事の遺体をまだ探索も埋葬もできません。家財を移動する人手も空間もなく、ただ従僕たちが壊れた道具と破れた衣類を取り出しだけです。

緊急政策が宮廷から発せられましたが、このような混乱はほとんど鎮静しません。医薬も医者も病院もなため、治療を得られず、多くの負傷者が息絶えました。王命によって治療を担当する医師も、壊疽の発病に直面し、治すすべがないのです。負傷した三人の従僕は、私とともにサン・ベント緑地の仮設小屋に収容され、病状はよくなりました。うちふたりは医師と医薬のお陰で大事には至らず、重傷のひとりにも回復の希望を寄せますが、確かではありません。

ナポリ公使ゲヴァラ卿の邸宅では、障壁と家財が多く破壊されたものの、ご地震と召使すべては無事でした。オランダ公使カルメット卿の邸宅では地震の被害のみならず、類焼前に家財を運び出す余裕はなく、すべて焼失しました。フランス大使バッシイ伯爵は難を免れ、大使館の背後が多少崩れながら、正面はそのままでした。イギリス全権大使は軽傷をされましたが、邸宅は堅固でした。プロシヤ弁理公使については、王都の邸宅も緑野の美しい別荘も安泰でした。

首相ペドロ・ダ・モッタ閣下の邸宅も大破され、七十歳歳の閣下は救出され、土蔵へ運ばれたものの、風邪の症状が悪化し、火曜日の午後逝去されました。その埋葬に立ち会うとともに、同家に預けられた国事文書を確認するため、王命によって国務尚書カルヴァリヨ閣下が水曜日に終日多々尽力されました。閣下の後継者に関してはこれまでの経歴と活動から聖職祿受領者アンドラド・サラボデイスが噂されますが、反対派があり、疑問の余地を感じます。私にはよく判らず、風評のみを書きました。王国の状況が多少鎮静するのを期待しております。...

昨日王命によってリスボン高等法院が指定の王都四カ所で再開しました。他方個人的な訴訟については当中止されたままで、市街と住民の壊滅状態で新たな裁判官も任命できません。日曜日の朝印刷ではなく、

手書きで総大司教の布告が過ぎのようになされました。すなわち、万難を排して改悛の祈禱行列を行うこと、その際各地区の首席司祭は天蓋を懸けてイエス十字架を担うこと、国王陛下、王子の三殿下、市議会の長老議員が旗竿を掲げること、祈禱行列には聖俗双方の聖職者、一般の人々が参加し、あとに続く跣足行列には王妃陛下とすべての王女殿下が加わること、ネセシダス宮殿へ到着し、聖フィリップ・ネリに因むオラトリオ会サンタ・マリア教会では、聖遺物奉納のあと最初に国王陛下が入場し、福音書に書かれたとおり天蓋のない椅子に座り、王子三殿下も各々の椅子に就くこと、かくして前述の首席司祭が聖母マリアに捧げる莊嚴ミサを営み、それに導かれて全員が祈禱し、唱和すること。そして、最後に礼拝堂音楽隊によって聖母マリアの連禱が厳かに奏せられ、王妃陛下と王女諸殿下は教会聖歌隊とともに合唱されること。なお、このためブレンの宮廷ではすべての四輪馬車を待機させると聞きます。

教皇大使アシエウリ一七五五年十一月十八日(？)付

教皇庁國務長官ゴンザガ宛報告(続)

崇敬する國務長官枢機卿殿下

先週は異常な動乱に遭遇し、神の加護により自宅の居室で奇蹟的に死を免れた私は、地震の前日に発熱したまま、あらゆる家族と一緒に緑地の貧弱なテント小屋におります。保持したすべての書類が瓦礫に埋もれ、自邸の執事と腹心の第一秘書もいないため、不如意極まる有様です。破壊された拙宅の寸前まで火の手は迫りました。テント小屋に普段着と傷ついた従僕三名だけを擁して、貧民、病人、負傷した者、瀕死の人に囲まれながら、慈善を行う場所も仕切りも得られないのです。教皇陛下が健やかにローマへ到着されたと承り、以上要点を報告しました。・・・

地震による邸宅瓦解の際に死亡した私の召使に関して、アゼヴェド神父からご配慮を頂きました。・・・長文の報告となったことをお赦しく下さい。 敬具。

教皇大使アシエウリ一七五五年十一月十八日(？)

ローマ教皇ベネディクト十四世宛報告

木曜日に宮廷へ参上し、今回の惨状についてカルバ卿と長時間協議を致しました。・・・召使のひとりが拙宅で瓦礫に埋れて死亡し、彼についてアゼヴェド神父からご配慮を頂きました。

教皇陛下には私の不備をなにとぞお赦しく下さい。いまこの国は震災によって最悪の事態にあり、だれよりもまず国王陛下が困窮しておられます。

ふたりの貴顕、法務官のラタ伯爵と**のテルサ神父は、恵み深い神の恩寵によって私と同じく脱出されました。拙宅は全面的に破壊され、家具類も瓦礫に埋れたままですが、ポロンハのオラトリオ会神父に導かれて、ラタ伯爵とともにここへ身を寄せました。一緒にいるバルトルツチ神父は脚部を五カ所負傷したものの、外科医によればさしたる危険はないようです。

私たち全員が窮状にあり、もつとも悲惨なポルトガル人として国王陛下は多大の財宝を失われたとは言え、教皇陛下の静謐をこうした報告が乱すことのないよう祈ります。①

アシエウリが辿り着いた避難先、サン・ベント・デ・ソーデの教会と修道院はリベイラ王宮から東へ約一・五キロ、アジューダの仮設御所へはさらに東約五キロに位置する。五二九年イタリアで創設され、ヨーロッパ最大

① Cardoso, *op.cit.*, pp.35-43.

の修道会であったベネディクト会も、イベリア半島への浸透はかなり遅く、トレント宗教会議の四年後、一五六七年にポルトガルで初めて結成された。リスボン西の近郊、現在のエストレラ大寺院の敷地に最初の修道院、通称サン・ベント古修道院が設立されたのである。一五九七年修道院長カレスマ神父の主導によって半キロほど離れた地点に、ベネディクト会の本拠とすべく、新たな修道院の造営が開始された。この建物は一六一五年に完成してサン・ベント・デ・ソーデ修道院、またはサン・ベント新修道院と呼ばれ、付設する施療院にはペスト等の患者も受け入れた。他方古修道院では聖職者養成のコレジオが主体となる。さらに十七世紀の中頃イエズ会の建築師バルタザル・アルヴァレスによって新修道院の改修と増築がなされ、壮大な堂宇には豪華な礼拝堂、一對の塔、四つの鐘楼が築かれ、僧坊や食堂や炊事場とともに、広い庭園も配された。①

アシエウリが身を寄せた二週間後、サン・ベント・ダ・ソーデの教会は、壊滅した総大司教教会の代替に決定され、聖務の再開に向けて慌ただしい準備も始まった。十一月十六日王命によってポルトガル陸軍の技官、建築技師カルロス・マルデルがここに派遣され、施設の改造を専門的に検討する。翌十七日マルデルはその報告書を提出し、同日避難先のオラトリオ会緑林学舎から総大司教マヌエル・ダ・カマーラはつぎのような文書をベレン宮廷に提出した。この文書はまず国務尚書のもとに届けられ、カルヴァリオの認証を付してジョゼ一世に捧げられる。リベイラ王宮とともに総大司教教会は壊滅し、アルファマの旧大聖堂、サンタ・マリア大寺院も甚大な被害を受けたため、かくしてサン・ベント・ダ・ソーデの教会と修道院は、カトリック教権の本拠となった。また、総大司教教会に付設する被災した古文書館と築城学舎もこの広大な堂宇に移された。②

教皇大使アシエウリ、一七五五年十一月二五日付教皇庁国務長官ゴンザガ宛報告

宮廷は引続き仮設御所で営まれています。このところ雨期に入り、常住するベレン離宮の庭園では、他の緑地と同様に雨露を凌ぐのが困難です。王宮の倉庫も炎上し、すべて焼失したため、王命によってアレメンティョ州の軍事野営地から、大量のテントを取り寄せ、まず巨大で適切な屋舎を建てるとともに、必要な場所にも多々配分しました。宮廷がベレンを離れるとも、木造御所の築造が着手されるとも、いまのところ申せません。方策のひとつとして国務尚書カルヴァリオ閣下とそのご家族は木造の仮設小屋を近くに建てられ、すくなくとも当面宮廷が地域はもとより、場所も変更せぬよう説得され、国王陛下の仮設御所の近くに別の木造屋舎を増築する意向を示されたようです。いまのところ確かなことはなにも判らず、国務尚書閣下の仮設小屋の付近で整地が始まった事実から、推測するのみです。

すべてに事欠いたまま、私はサン・ベント修道院の緑地に居続けておりますが、仮設のテント小屋に家族、執事、秘書、召使が同居し、だれもがきわめて窮屈な有様です。召使のなかに負傷者もいて、長期の治療を要します。しかし、周囲の様相を申せば、到るところにテント小屋が林立し、同じ容態の被災者が数千人も身を寄せるのです。このような紛乱の耐えることはもはや不可能であり、大使の責務として是非ともほかの地へ移動すること、被災を免れたものの、住み手のない建物を探すことを決意しました。市街の大半が炎上してすべて壊滅し、人口稠密な地域が無人の野に化したからです。

またベレンに行く途上、王宮の近くでナポリ駐在ポルトガル公使、ジョゼ・シルヴァ閣下の邸宅が目につき、修理中のため貸家にされないとの噂を聞いたので、公使の代理人に王命が発せられ、私が借りられるよう国務尚書カルヴァリオ閣下をお願いしました。閣下は私の懇請を諒解して、国王陛下に上申され、王命で

① *Cronologia Monastério S. Bento de Saude*, vt.3513. online.

② *Memorias das Principaes Providencias*, 1758, Lisboa. pp.25-26.

Dictionario da Historia de Lisboa, Lisboa, 1994. pp.788-793.

代理人を呼び寄せて、貸家として整備する旨命じられました。こうして代理人は礼儀正しく私のもとを訪れ、喜んでご意向に添いたいと申しました。そこで下見に赴いた私は、四室しか使えないので、いまのような状況でなければ、住めないと悟りました。しかし、木造の建物か小屋を**破壊された自分の邸宅と庭園を補うために、現在はそれが役立つはずです。宮廷の近くに住みたいという私の希望をお認め頂きたいのは、重要で緊急な事項について協議する便宜ととともに、各教区の信者を再度組織し、あちこちに離散した修道女を総大司教区に呼び戻す必要、彼らを神への勤行に専念させ、徐々に平素の生活へ復させる必要を感じるためです。

こうした事柄について話し合い、率直な気持ちを伝えて別れました。国王陛下からは、高邁なローマ教皇に丁寧なお言葉を頂き、私の意向をも聴取されたことをに感謝しております。(幸いにもジョゼ・ダ・シルバ閣下の邸宅へ寄寓することを、ナポリ駐在教皇大使にも宜しくお伝えください。)(ペルナンブコから来た六艘の船がポルトへ迂回しました。)荒廃した王都はいま極度の食糧不足に陥っています。

ほかの側面でも荒廃と惨状が続き、日々刻々深刻で憂慮すべき事態が生じ、宮廷でも街々でもいまや以前の面影が消えました。市街が壊滅し、四輪馬車では道が通れないため、改まった外出の際には騎馬か籠車を利用します。

いまもたえず震動を感じ、建造物の障壁、建物の片端や部分が崩れぬ日はありません。日々派生したり、進行している事態を系統的に整然と述べることは不可能です。盗賊は処刑の実施と本来の取締りによって以前より減少し、国外へ逃げ出した者も多く拘束されました。①

緊急政策としてポルトガル政権は、十一月二日に飢餓防止のため食糧の確保を治安回復のため軍隊の駐屯を指令し、さらに四日の勅令では盗賊の処罰と盗品の探索に重点が置かれた。王都全域がなお錯乱の極にあり、頻発する犯罪への厳罰が命じられた。

十一月四日以降に発送したアシウエリの報告はいずれも教皇庁になお届かず、彼の安否も不明とされた。その間ヴァチカンからの訓令も皆無であるが、教皇大使としての通信は怠りなく続けられる。

教皇大使アシエウリ、一七五五年十二月二日付教皇庁國務長官ゴンザガ宛報告

宮廷は依然ベレン緑地の仮設御所で営まれ、冬期を充分凌げるよう緑地に木造の建物も造られました。日曜日に私は宮廷に行き、お元氣な国王陛下と王子諸殿下とお会いしました。王妃陛下と王女諸殿下はご不在でしたが、その朝礼拝に出向かれ、聖体を拝領されたとの由です。

王都では大半の緑地にテント小屋が林立し、そこに跳梁する盗賊になお厳しい裁きが続けられ、彼らの多くは街路の清掃や非常時の労務という刑罰を宣告されました。彼らの自供によれば、船舶や地下に隠された盗品は、百万**にも達すると算定されます。すべて盗品は本来の所有者に返還されるはずです。

地震と火災による死者の総数は四万人以上に及ぶとも推定され、國務長官メンドンサも実際の数値に近く、誇張ではないと私に語りました。しかし、おそらく住宅や教会の荒墟にあまたが埋もれたままで、なお掘り起せず、地震発生の日脱出した多数が死者とみなされたようにも思います。

掠奪を根絶するため、王命によって数日来大勢の兵士によって王都全域に非常線が張られ、職務、技能、作業のため往来する人々を規制し、仕事を失った沢山の流浪者や物乞い逮捕しました。しかし、減少はしたものの、王都各地区やこのあたりの緑地でも掠奪の発生が連日絶えません。

① Cardoso, *op.cit.*, pp.43-46.

他方国王陛下の要望によって、イタリア施療院のカプチーヌ会士、イタリア人クレメンテ・ニザ神父が、晩餐のあと八日間仮設御所の脇でミサを行い、陛下をはじめ王室ご一同は御所の出口で、またあらゆる身分の廷臣がその外でこれに列しました。この神父はポルトガル語で説教して、参列者を傾聴させます。私も日曜日に参加して、ポルトガル語がすこしは判るので、慎重かつ熱烈な説教と感じました。

しかし、修道会の会士にせよ、在俗の司祭にせよ、恣意的で錯乱した多くの聖職者が軽率な行動を続け、脅しと偽りを説教するのに、耐え難い思いです。なぜなら、国王陛下は親書で総大司教枢機卿陛下に忌諱の念を伝えられた、と國務尚書閣下は私に語られ、事態を重視してどうすべきかと密かに問われるのです。総大司教陛下におかれても恣意的で無分別な布教を禁止されたと承ります。福音書の記述に反する事柄を教えれば、素朴な民衆の恐怖を募らせるとして、数人の聖職者がお咎めを受け、説教を禁じられたようです。こうして臆病な娘や無知な者を真理に導く慎重な布教が奨励されました。

・宮廷も王都もなお混乱と恐怖に包まれ、さきに述べたとおり・・・①

教皇大使の通信には治安の悪化と王権による検察がなお記述されるが、十二月二日付報告でとくに注目されるのは、信教上の深刻な問題が初めて言及されたことである。すでに本稿で再三提示したとおり、震災を神意による懲罰と信じ、赦免と恩寵を願う狂熱的な説教や祈祷は、多くの在留イギリス人により伝えられている。また、オラトリオ会の神父マヌエル・ポルタルの震災記録には、地震発生直後から街角や広場で、避難民に悔悟と贖罪を促す同志の聖職者数名が描かれている。

しかし、ポルトガル王権が警戒したのは、イエズス会の修道士、とくにガブリエル・マラグリダの説教である。一六八九年北イタリアで生れたマラグリダは、二二歳の時ジェノヴァでイエズス会修練所に入門した。一七二一年彼はブラジルへ伝道師として派遣され、やがて旺盛な布教と烈々たる弁論で著名となる。十八世紀前半ポルトガルではジョアン五世のもとで絶対王政が最盛期を迎え、ローマ教皇からリスボンへの総大司教座を裁可された。国王が脳溢血で倒れ、信仰に沈潜した一七四九年十二月、ブラジルでの布教支援を請願するため、ポルトガルを訪れた。かねてイエズス会を庇護するジョアン五世は、伝道への資金調達を約束するとともに、なお数カ月リベイラ王宮で祈祷と説教を営むよう懇請する。こうして宮廷挙げての歓待と信望を受けて、マラグリダは最晩年の国王に慰藉と安堵を与え、翌年の七月三十一日その臨終に際して終油の儀式を主宰した。②

一七五四年からふたたびリスボンに滞在したマラグリダは、翌年の十一月一日礼拝堂で大勢の告解者に対応するさなか、大地震に襲われた。ポール・デュリ著『ガブリエル・マラグリダ伝』はその日の模様について語る。

礼拝堂で聖務を開始して二時間ほどのち、地面が唸り、揺れ始めた。ついで不意に衝撃が襲い、即座に教会の障壁が轟音を発して倒壊し、穹窿きゆうりゆうから割れた石材が礼拝堂に溢れる信者たち直撃した。堂内は阿鼻叫喚の極みである。この惨劇を見てマラグリダは、落涙して天を仰ぎ、往古のダヴィッドの如く叫んだ。「主よ、覚悟はできております！」わが身の危険も顧みず、十字架を手にして彼は、瓦礫のなかへ突進して、手脚の負傷者を救出し、息絶えつつある者のため、臨終の祈りを捧げたのである。③

① Cardoso, *op.cit.*, pp.47-49.

② Paul Murry, *Histoire de Gabriel Malagrida de a compagnie de Jésus*, Paris, 1865. pp.1, 11, 161, 169-170.

T. D. Kendrick, *The Lisbon Earthquake*, New York, 1755. pp.136-139.

③ *Ibid.*, pp.208-210.

以後連日寢食を忘れてマラグリダは、救済活動を続けるとともに、頼り来る民衆に説教を重ねた。熱烈な彼の教えによれば、地震発生の原因は、人間の背徳に対する神の怒りであり、頽廢したリスボンに劫罰が下されたのである。一年後に公刊された小冊子、マラグリダ著『リスボン地震の真なる事由に関する所信』にこうした説教の大要が纏められ、冒頭にはつぎのような檄文が掲げられた。

忠誠なる公民が祖国に大いなる貢献を果すためには、悲痛な破滅と惨劇を、悪辣で危険な魔手が王国で企てるのを暴露すべきである。同胞への博愛と鬱積する苦悩を抱きつつ、私は悲しくも直視せざるをえない。かくも華麗で豊饒な宮廷が、敬虔で篤実な国王陛下の晴朗かつ平安な治世、四海の殷富な宮廷からも羨望の的であった治世から、忌諱すべき事由によって墮落の淵に沈んでいる。また、公益の蹂躪をかならず阻止し、かつての栄光と安寧を蘇生させる希望と方策が見出せると、幻想に捉われている。

リスボンよ、凝視するがよい！ かくも多くの建物と宮殿の壊滅、かくも多くの寺院や修道院の崩壊、かくも多くの住民の死亡、かくも多くの財宝の焼失を凝視するがよい。堅固なこの地をかく衝撃と錯乱に陥れたのは、彗星や星雲、蒸気や油煙、雨露や寒暖ではなく、ひとえに我らの非道な罪過にほかならぬ。

この重罪は予言者イザヤに語られたエジプトの罪過にあたる。かつて世界一の殷富な王国が悲惨の淵に落されたように、ヨーロッパの女王と評される宮廷が、見るだに醜悪な遺骸に変じたのである。(重荷が身を苦しめるように、不正がわれらの頭部を苛める。)(『イザヤ書』第九十章) ①

マラグリダの教法はリスボンの栄華と驕慢を諷めるだけでなく、ポルトガル王権を神意にも公益にも背くとし、ジョゼ一世と國務尚書カルヴァリオの逆鱗に触れるものであった。自身が崇敬と厚遇を受けたジュアン五世の統治を暗に讚美しつつ、墮落した宮廷に神の劫罰が下されたと叫ぶのである。こうした相克はやがて凄絶な葛藤となつて、一七五八年後マラグリダは異端審問のすえ火刑に処せられ、イエズス会全体が国外追放を命じられる。

しかし、ジョゼ一世の逝去とカルヴァリオの台頭によって逆風に立つマラグリダにも、宮廷でもなお王族の一部にはなお信頼が篤く、アヴェイロ公爵やタヴォーラ公爵などカルヴァリオ反対派の支持もあった。

イエズス会を擁護したとの理由で教皇大使アシエウリも同年国外へ追放されるが、ここに提示した十二月二日付書簡では、むしろカルヴァリオ寄りに警世的な説教には批判的である。イエズス会のコレジオに修学した彼であるが、王権の動向を見定め、震災への対応はきわめて慎重に感じられる。

ついで十二月九日付書簡はかなりの長文に及び、仮設御所におけるジョゼ一世の挙措^{きよそ}や聖務をめぐる総大司教との齟齬^{そご}が語られる。国王への応答から判断すれば、この時点までにアシエウリとローマ教皇庁との間で、なんらかの交信がなされたと思われる。しかし、次節で示すように、正規の通信先である國務長官ゴンザガが、震災後初めてアシエウリの報告を受理し、最初の訓令を返信するのは、十二月十一日である。

ローマ教皇大使アシエウリ一七五五年十二月九日付教皇庁國務長官ゴンザガ宛報告

極度の動転のあまり、不本意にも総大司教座要職の方々に失礼を重ねております。・・・王都がかくも凄絶な変貌を遂げたあと、私たちが協議しても、この危急に対応できぬと感じるのみでした。

土曜日の午前通例どおりベレンの応接間において国王陛下に拝謁申し上げ、陛下をはじめ王室ご一家全員

① Gabriel Malagrida, *O Juízo da Verdadeira Causa da Terremoto que pareceo a Corte de Lisboa*, no

primeiro de Novembro de 1755, Lisboa, 1755. pp.3-4.

のご健在を祝しましたが、震災後いつもなされるように、陛下は私を仮設御所の内部に導かれ、王宮全体の惨状を話されました。今回もローマ教皇猊下との交信について陛下よりお尋ねがありました。教皇庁については近日ようやく情報が得られ、私の報告を受けた猊下は慈父のごとく心を痛めておられる、とお答えしました。教皇猊下の同情と神のご加護を光栄に感じ、惨憺たる王国と王都のため真摯な祈願を続けると陛下は申されます。教皇猊下に安堵して頂くため、模範的な贖罪祈祷行列が先日王都で実施されたこと、またその模様には自分は落涙するまでに感動し、国王陛下へ慶賀を捧げたことを、報告でお伝えしたと、私は応答しました。陛下はこれに満足されたご様子で、教皇猊下へは敬愛の念を、不肖私には親愛の情を示されたのです。仮設御所に住まわれる三人の王子殿下に挨拶したあと、國務尚書カルヴァリヨ閣下と長時間要談を致しました。まず閣下に訴えたのは、私の提案にまだ合意されないため、総大司教座としての配備が遺憾にもなされず、それに相応しい典礼を行う場所がどこにもありません。なぜなら、修道女はいつも危険と恥辱に曝され、また司祭が廃墟と化した教区を見棄て、緑地などへ逃れ、さらにコレジオでも仮設小屋だれも聖務を再開しないからです。この問題に関して國務尚書閣下は総大司教の無為を嘆いたあと、王命で慎重に作つたとして、修道女と司祭に係わるいくつかの構想を提示されました。閣下が付言されるには、自身の役割ながら総大司教猊下が、いまだ結論を示さぬと、その朝国王陛下は怒りを籠めて語られ由です。……

そこで私は日曜日に総大司教猊下を訪れて激励し、金曜日の祈祷行列について、さらには断食を首唱する猊下の憂慮すべき告知について話しました。あらゆる階層の人々が各自体験した惨状と長期の絶大な艱苦に打ち砕かれ、みずから猊下ご自身が即座に決断されたのに、だれしも倣ならおうとしないのです。見棄てられた教区を立て直すため、教区司祭の補充が必要であることを、控え目に申し上げ、ミラノでのペスト蔓延における聖カルロス・ボラメオのように、偉業にふさわしい高位聖職者、たとえばレイラ司教を教皇大使の切望として推挙しました。猊下はこれらすべてを諒承され、とりわけ総大司教教書がすぐに用意されました。ラセデモニア大司教、司教総代理によってある文書が綴られたのを、つとに私は國務尚書閣下から知らされていました。それを印刷することを総大司教猊下は望まれないのですが、国王陛下のもとに届いて、陛下をはじめ遍く宮廷で歓迎され、王命によって躊躇なく印刻されるはずです。総大司教猊下こそそれを印刷に付して布告すべきですが、すぐに届けると約束されるだけで、私にも提示されず、八日目の今日なお國務長官枢機卿閣下に報告できずにあります。

宮廷は依然ベレン緑地の仮設御所で営なまれ、王都およびあらゆる階層のため多数の緊急かつ重大な要件に対処すべく、国王陛下は閣僚とともに精励されています。今日もまた余震があり、強度ではないものの、過去の恐怖から戦々恐々としております。

大火は家々の財貨、とりわけ王立税関所や商易の倉庫を焼き尽し、鎮火の手立てもありません。第三の災厄とも言ふべき掠奪もいまだ絶えず、逮捕や判決のなされぬ日は稀であります。テント小屋に多くの人々が住む緑地には、処刑台が設けられ、絞首刑の遺体が横わっています。地震と火災による死者の数は、実際に四万人以上と噂されます。

邸宅、居室、障壁、修道女などの寮舎、さらにはこれまで持ち堪えた建物が、崩れたと話されるのを、毎日耳にします。したがって、馬車で市街へ乗り入れることは不可能であり、多くの農場、村落、教会、菜園を擁する近郊でも困難です。……

現在も私はサン・ベント修道院の緑地に住み、前述の邸宅内に仮設小屋を建てる木材も人夫も供されないため、あらゆる側面で極度な不便を強いられています。しかし、今朝王命によってリスボン知事、フォンテス公爵が代理人をとおし私により快適で便利な仮設住宅への入居を許可されましたが、さらに王命を頂き、

高額な前払いをしなければ、木材も人夫も供されません。・・・

①

初出 二〇一四年七月十四日
更新 二〇二一年八月一二日